

ここに記して謝意を示す。

引用文献

- 秋山信彦. 2015. シロウオ. 環境省(編), pp.316-317. レッドデータブック 2014 4 汽水・淡水魚類 日本の絶滅の恐れのある野生生物. ぎょうせい, 東京.
- 福岡市農林水産局. 2011. 豊かな海再生事業(漁場環境調査: シロウオ)委託報告書(資料編). 福岡市農林水産局, 福岡市. 18 pp.
- 長谷川拓也・小路 淳. 2017. 広島県三津大川におけるシロウオの遡上および産卵場の環境特性. 日本水産学会誌, 83: 574-579.
- 伊豫岡宏樹. 2018. 樋井川の大規模河川改修がシロウオの産卵環境に与えた影響. 河川技術論文集, 24: 321-326.

- 伊豫岡宏樹. 2021. 室見川汽水域の河道形状の変化とシロウオ産卵場への影響. 河川技術論文集, 27: 359-362.
- 萱場祐一. 2010. 新しい中小河川改修と生態系の応答 河道地形の変化に着目して. 地盤工学会誌, 58: 10-13.
- 松井誠一. 1986. シロウオの生態と増殖に関する研究. 九州大学農学部学藝雑誌, 40: 135-174.
- 小山正忠・竹原秀雄. 2007. 新版 標準土色帖. 日本色研事業, 東京. 12 pp.

(伊豫岡宏樹 Hiroki Iyooka: 〒 814-0123 福岡県福岡市城南区七隈 8-19-1 福岡大学工学部 e-mail: iyooka@fukuoka-u.ac.jp)

書評・Book Review

魚類学雑誌 68(2):194-195
2021年11月5日発行

沖繩さかな図鑑. 一下瀬 環. 2021. 沖繩タイムス社, 那覇, 207 pp. ISBN978-4-87127-281-0. 1,800 円(税別).

本書の肝を端的に示すと、著者の下瀬 環博士がみた沖繩県の水産物のすべて、である。

本書には沖繩県の水産物の現場で約 20 年ものあいだ研究活動を進められた著者によって収集された写真資料に加え、確かな知識と経験が上積みされた情報がこれでもかというほど詰め込まれている。大小さまざまな個性的な島々によって構成され、南北に細長く伸びた沖繩県は、フィリピン東方沖より始まる黒潮が日本の海域へと流れ込む玄関口であり、日本国内においてもっとも多様な魚種が分布する豊かな海であることに疑いはないであろう。南の海の魚類に関わる誰しもが、「いったいどれほどの魚種が沖繩にいるのだろうか」と考えたことがあるのではないだろうか。実はその疑問に答えてくれる文献はほとんどない。もちろん、2013 年に出版された『日本産魚類検索 全種の同定 第 3 版』[中坊徹次(編), 東海大学出版会]をしらみつぶしに確認することで、沖繩県の魚類についてみえてくるものはあるだろう。しかしながら、沖繩県という単位でみられる魚類にスポットをあて、(対象が水産物に限るとはいえ)網羅的に報告した文献は本書が初めてではないだろうか。

本書は大きく分けると、図鑑部分とその背景となる水産業・釣りに関わる情報紹介部分とで構成されている。当然、後者は 20 頁ほどと 160 頁以上にもなる図鑑部分と比べると少ないボリュームではあるものの、今後、この部分にお世話になることがたびたびあるだろうと確信している。沖繩県は自然環境という点だけではなく、文化的側面においても県外との違いが大きく、これは水産業という分野においても例外ではない。たとえば漁法である。「デントウモグリ」と聞いて、どのような漁法を思い浮かべるだろうか? 沖繩県の伝統的な船であるサバニを用い、素潜りでヤスを片手に、美しいサンゴ礁を泳ぐイラブチャー(ブダイ類)を突くような「伝統的な潜り」を想像している方が多いのではなかろうか。実はデントウモグリは漢字で書くと「電

灯潜り」で、夜間に電灯をもって獲物を突く漁のことである。タンクを用いたスキューバ潜水や、船からホースによって空気を送るフーカー潜水を用いるのでおよそ伝統的な潜り漁とはかけはなれているわけだ。電灯潜り漁は沖繩県ではごく一般的な漁法であり、沖繩県で水産業に関わったことのある方なら常識といっても差し支えないだろうが、逆説的にはそれぐらい常識が違うことが分かっていたいただけるだろうか。少し話が横道にそれてしまったが、本書はこういった異なる常識を沖繩県内の読者、県外の読者、あるいは研究者から一般の方にまで、誰に対しても分かりやすく丁寧に説明をしてくれている。こういった、言ってみれば常識的なことに対して丁寧な説明を付されているスタンスは漁法という点だけでなく、各魚種の地方名や生息環境、取り扱い方、釣り、さらには資源管理に関する情報、さらにはおそらく読者や現場の要望に答えた結果であろう魚類以外の水産物の紹介に至るまで、とことん丁寧に沖繩の水産物に向き合う著者の情熱が伝わってくる。

図鑑部分の特徴は、同一頁内で、縮尺がおおむね同じになるように写真の大きさが調整されていることである。これについては、図鑑をデザインするうえでの悩ましい問題であることは理解できるものの、小さい魚種の写真がどうしても小さくなってしまっただけでなく、一読者としてしまったいなさを感じてしまう。とはいえ、本書には水産生物 734 種(うち魚類が 632 種)が掲載されており、この種数はこれまでの沖繩県にスポットをあてた図鑑として最大ではないだろうか。また、沖繩県の市場や釣りで良くみられる魚種だけでなく、分布記録としてきわめて貴重な情報も掲載されている。例えば本書には与那国島産のカタクチイワシの写真が掲載されている。カタクチイワシといえば、北海道から九州までであれば誰も驚かない超がつくほどの普通種であるが、沖繩県に分布するとすれば衝撃だ。本書によると、著者は与那国島の沖合で大群が群れているのを確認し、その日に水揚げされたクロカジキの胃からも大量にでてきたという。こうした思いもよらぬ掘り出し情報があるのは、ひとえに掲載されている写真や解説文が著者自身の経験に基づくものであるからに他ならない。全体を通じて、解説文には魚種の珍しさの印象や市場価値、食した感想は、あくまでも個人の意見

として書かれており、新規性の高い情報も多い。とはいえ、水産物に焦点をあてている以上は仕方がないことではあるが、情報の充実した分類群とそうでないものの差は大きい。これは著者の好みによる部分が大いなのであろう。そういった点において、種によっては、やや情報が物足りない印象があることは否めない。

総括すると、本書は沖縄県の水産物を知るうえでの必読書といえるであろう。冒頭にも述べた通り、沖縄県の水産物はその種組成から文化的側面まで県外とは大きく異なっている。また、沖縄県に分布する魚種の多くは、黒潮の影響で鹿児島県の島嶼群（薩南諸島）から南日本沿岸域、さらに小笠原諸島、ときには北日本にまで分散することを踏まえると、黒潮という日本列島に多大な影響を与える海流の上流部にあたる沖縄県の魚種について理解を深めることは、極端に言うと日本の魚類について理解を深めることと同義といえる。そういう意味においても、本書は日本で魚類学に関わる研究者であれば所持して決して損をしない一冊である。また、漁業者や釣り人に対しても、

漁獲物、釣獲物に対する知識を深め、研究分野との連携にもなりうる適切な取り扱いへとつながることが期待される。沖縄県の水産業が抱える大きな課題として、これだけ豊富な水産資源を抱えながら、その消費量は全国でも最下位に沈んでいることが挙げられる。その理由には、多様な魚種が採れることに起因する、美味しいのか分からない、調理法が分からない、そもそも魚の名前が分からないからどう調べて良いのかも分からない、という知識の不足も少なからず関係するであろう。漁師や市場関係者、釣り人たちが本書を片手に魚をみながら、これでもない、あれでもないとユンタク（雑談）している、そんな日が来れば沖縄県が抱える問題も少し解決するかもしれない。知るということは、それだけ生物との距離が近くなることである。本書が沖縄の魚を知るための大きな助けとなることに疑いの余地はない。

（小枝圭太 Keita Koeda：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学総合研究博物館 e-mail: koeda@um.u-tokyo.ac.jp）

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌 68(2):195-197
2021年11月5日発行

追悼

中村 泉博士の逝去を悼む



写真1. 中村 泉博士 (1938-2021)。

舞鶴の巨星が落ちてしまいました。日本魚類学会の元評議員でマグロ研究の第一人者であった中村 泉先生が3月22日に急逝されました（写真1）。82年にわたる海の男の色濃い生涯でした。中村先生は長年、高血圧に悩まされて来られましたが、不運にも5年前に舞鶴市内において脳出血で倒れ、左半身不随となってしまいました。以来、設備の充実した京都市内の施設で精力的にリハビリ

リ生活を送られてきました。倒れられた直後は飲み込むこともできないくらいの症状だったのに、リハビリのこともあって、健康上の問題は全くなく、食も進み、元気な日々を送っておられました。それゆえ先生の急逝は全く予期せぬことで、最後の幕引きはサプライズでした。亡くなられた直接の原因は喉から3.5 cmのリングが見つかったことから、どうやら朝食中に食べ物を喉につまらせたことのようにです。奥様の禮子様のお言葉を借りれば、「本人にはまるで似つかわしくない童話「白雪姫」のストーリーのよう」とのこと。たまたま手帳のメモに遺言が残されていたので、そのとおりに葬儀を行わず、うちうちでお別れ会だけを済ませました。コロナ禍であったことに加え、一同に会することも極力避け、先生のご希望通り、ベートーヴェンのチェロソナタ第3番が流れる中、執り行われました。

中村先生は1938年（昭和13年）12月24日、名古屋市にお生まれになりました。根っから海が好きで、海とのかかわりを持ちたくて1958年京都大学農学部水産学科に進学され、大学院を経た後、舞鶴において約40年間にわたりマグロ・カジキ類を対象に魚類の分類について研究を続けてこられました。舞鶴といえば、日本の魚類分類学の基礎を築いた松原喜代松教授（1906-1968）の指導の下、数多くの魚類学者が学んだ聖地です。当時、水産学科の学生は2回生まで吉田（京都市）の教養部で、3回生からの専門課程を舞鶴でそれぞれ学ぶようカリキュラムが編成されていました。舞鶴のキャンパスは旧海軍の施設を受け継いだものであり、学生たちは寮生活を通じて青春を謳歌していました。舞鶴で学部生・学部生達はいわばファミリーを構成し、私は中村先生から尼岡